日本医史学雑誌　第68巻第1号（2022）　60–64

筑後久留米藩主有馬頼咸の最期の病状
――平川良栄と高松凌雲と佐藤進が診療――

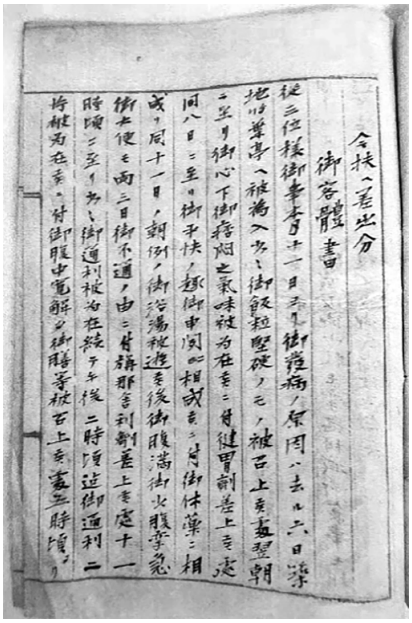
中山　茂春

福岡和白病院精神科部長／久留米大学医学部非常勤講師（医学史）

筑後久留米藩医平川良栄は同藩医中山元琳と共に明治3年10月から明治4年8月まで当時英医ウイリアム・ウィリスがいた鹿児島医学校でイギリス医学を学んでいます[1]．平川良栄の子孫に伝わる歴史資料が福岡県久留米市役所文化財保護課に寄贈されています．その資料の中の「令扶への差出分　御容体書（平川良栄）」と「従三位有馬頼咸公病状並びに御容体書（高松凌雲謹識）」等について紹介いたします．

有馬頼咸は筑後久留米藩の第11代（最後）の藩主．正室は将軍徳川家慶の養女精姫，実は有栖川宮韶仁親王の王女韶子である．東京都中央区にある中央区有馬小学校は明治8年に有馬頼咸の寄付によって創立された為，その名があります．平川良栄[1]は廃藩置県後の明治12年8月に東京府日本橋蠣殻町に医術開業している．資料によれば平川良栄は有馬頼咸の最期の病気に関して主治医として治療に当っています．平川良栄は治療の途中で高松凌雲の応援を乞うています．又，途中で陸軍軍医監佐藤進が来診とありました．高松凌雲[2,3]は筑後久留米藩出身であり平川良栄とは同郷です．高松凌雲は適塾で学び，将軍徳川慶喜の弟徳川昭武のお付きの医師としてパリ万博に随行してフランス医学を学び（慶応3年～慶応4年），箱館戦争を経て明治維新後は東京で開業している．佐藤進氏[4]はベルリン大学で医学博士号取得，第三代順天堂党主，陸軍軍医総監です．

平川良栄の令扶への差出分御容体書は記述は下記の通りです（資料1）．



資料1　平川良栄の令扶へ差し出し分御容体書（久留米市役所文化財保護課所蔵）．

『従三位様御事本月十一日ヨリ御発病ノ原因ハ去ル六日築地竹葉亭へ被為入，少々御飯粒堅硬ノモノ被召上候処，翌朝ニ至リ御心下御痞悶之気味被為在候ニ付健胃剤差上候処，同八日ニ至リ御平快ノ趣御申聞ニ相成候ニ付御休薬ニ相成リ，同十一日ノ朝例ノ御浴湯被遊候後御腹満御少腹攣急，御大便モ両三日御不通ノ由ニ付旃那舎利剤差上候処，十一時頃ニ至リ少々御通利被為在，続テ午後二時頃迄御通利ニ行被為在候ニ付御腹中寛解，夕御膳等被召上候処五時頃ヨリ又々御腹痛相発シ，六時過ニ至リ相止候得共御発熱強ク終夜御安眠難相成候

同十二日御腹満御同様御少腹攣急追シ御緩ミ被遊候得共御熱気去兼候ニ付キニーネ剤差上候

同十三日御熱気同断御少腹攣急同断，御大便其

後通無之ニ付又々舎利塩剤差上候処，両三度之御通利有之候得共兔角御渋滞之気味被為在候ニ付，蜂蜜蓖麻子油之灌腸差上候処十分之御通利有之候御腹中稍緩解致候

同十四日御熱気追々御減少御少腹モ攣急相減，御食事モ相進候処，同夕ヨリ御少腹又々御疼痛被為在候

同十五日御熱気癒御減退御飲食モ御進ミ御遊候得共，前夜ヨリノ御疼痛去兼候ニ付コロラール灌腸差上候処大ニ御軽快被遊候

同十六日午前一時頃ヨリ又々御攣痛甚シク御腹満モ相増候ニ付，モルヒネ剤差上候処五時頃ニ至リ稍御寛解被遊相成候得共，左ノ御臍旁御痙攣強ク御熱気又々御再発腸炎衝ノ姿ニ推移候ニ付，防炎諸方差上且キニーネ水剤差上候

同十七日御熱気稍御減少御飲食モ稍御進ミ被遊候処，同夜九時半頃ヨリ又々御少腹御急痛之気味被為在，且御大便モ御通無之ニ付蜂蜜グリスリン之灌腸差上候処，大ニ刺激ヲ起シ御攣急甚ダシク十八日午前六時頃迄凡六七行之御通利被為在候得共，其御通利毎ニ御疼痛相増シ御気力次第御減衰不容易儀ニ奉診候

同十八日御食気無之唯々御冷渇御手足厥冷汗出御脉不振御気力漸々御減衰被遊候乍然左ノ御少腹時々御疼痛被為在候ニ付不得止蜌針三十條差上候処，大ニ御緩ミ御安臥被遊候様相成候

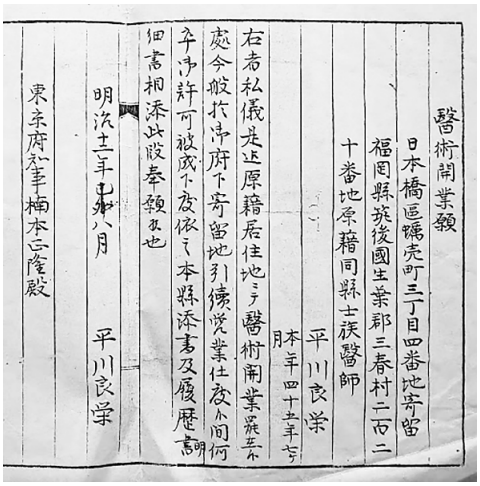
同十九日御同様ノ中，右ノ御少腹御疼痛被為在候ニ付，又々蜌針十五條差上候処速ニ御寛解被遊候得共，左ノ御少腹又々御疼痛被為在候ニ付又々蜌針四十條差上半吸吮ニテ脱落為致，跡ハ緩和琶布水銀膏等差上候得共一躰御腹満相増シ腹膜炎衝ノ勢ニ相成，御気息御困難之御模様ニ奉診候

同廿日午前三時頃御煩悶強ク御模様ニ相成候ニ付，龍麝水等差上候処稍御回復之御様子ニハ相成候得共追々御衰弱相見候

同廿一日午前二時半俄ニ御発痙御窒息被遊奉恐入候右御容躰書大畧如是御坐候也

五月廿一日　　平川良栄』

（資料2）（資料3）


醫術開業願
日本橋區蠣殻町三丁目四番地寄留
福岡縣筑後國生葉郡三春村二百二
十番地原籍同縣士族醫師
平川良栄
本年四十七年七月
右者私儀是迄原籍居住地ニテ醫術開業罷在
處今般於東京府寄留地引續開業仕度ハ間何
卒御許可被成下度依テ本縣添書及履歴書
但書相添此段奉願候也
明治十年五月八日　平川良栄
東京府知事楠本正隆殿

資料2　平川良栄の東京府への「医術開業願」：自宅に残されていたので下書きと思われる（久留米市役所文化財保護課所蔵）.

資料3　平川良栄（～明治24年9月25日没52歳．女系子孫が保存の写真）.
筑後久留米藩医：鹿児島医学校の英医ウィリスに英方医学を学ぶ.

高松凌雲謹識の『従三位有馬頼咸公病状並びに御容体書』は下記の通りです.

『老公年五十七平素強壮体格甚ダ堅実ナラズト雖ドモ未ダ曽テ大患ニ罹ラズ，只往歳腸カタルヲ患テ後下行結腸部ニ硬結ヲ残シ往々疝痛ヲ発スルノミ，常ニ飲酒ヲ好マズ摂生ヲ慎ムト雖ドモ食量多キニ過グ，本月六日嗜ム所ノ鰻鱔ヲ喫ス，其飯常ノ如ク軟ナラズ為ニ稍々其量ヲ減

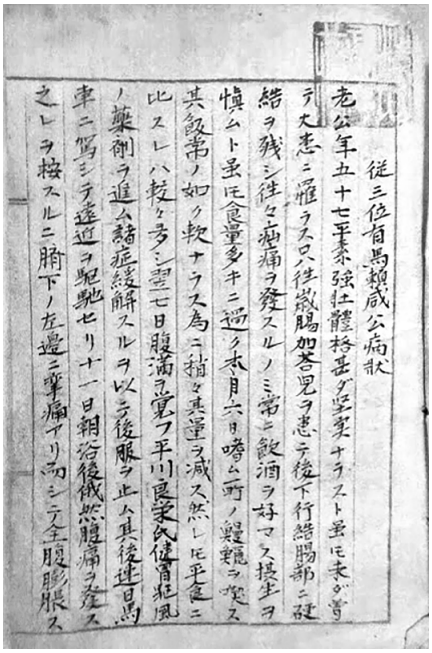
ズ，然レドモ平食ニ比スレバ較々多シ，翌七日腹満ヲ覚フ，平川良栄氏健胃駆風ノ薬剤ヲ進ム，諸症緩解スルヲ以テ後服ヲ止ム，其後連日馬車ニ駕シテ遠近ヲ駆馳セリ，十一日朝浴後俄然腹痛を発ス，之レヲ按ズルニ臍下ノ左辺ニ攣痛アリ，而シテ全腹膨張ス，ヒヨスエキス及ビモルヒネヲ進メ稍々鎮痛ヲ見テ旃那舎利塩等ノ下剤ヲ用イ快通ニ三行ニシテ益々鎮静ス，然レドモ又五時頃ニ至リ腹痛ス，熱ハ三十八九度ノ間ニアリ，十二日キニーネヲ用ユ，十三日大便秘結スルヲ以テ舎利塩下剤及ビ蜂蜜蓖麻子油ノ灌腸ヲ施シ，快通攣痛稍々緩解ス，十四日漸ク軽快ニ赴ク如シト雖ドモ痛緩急アリ，或ハ全ク消退スルガ如ク而シテ復疼痛ヲ発ス，十五日ニ至ルモ其痛ミ止マズ，因テコロラール灌腸ヲ施シ愈々軽快ヲ見ル，十六日午前一時俄然劇痛ヲ発ス，乃チヒヨクエキス及ビモルヒネヲ投ジテ稍々緩解シ七八時頃ヨリ漸ク鎮痛セリト云フ

十六日平川氏ノ急報アリ，午后三時始メテ往診ス，病来ノ日数ニ比スレバ衰弱甚ダシ，脈一百搏微ニシテ痙攣性ヲ帯ブ，体温三十九度舌上乾燥シテ黒苔ヲ帯ブ，大渇引飲腹部膨脹ス，之レヲ按ズルニ左ノ下腹部ニ一小塊ヲ觸ル，強壓スレバ重痛，軽按スレバ軽快ヲ覚フ，盲腸部モ亦微痛ノ感ヲ覚フ，而シテ体温ニ昇降アリト雖ドモ熱候已ニ六日ヲ経過セリ，因テ截熱ノ方法ヲ平川氏ト議シ，キニーネ九グレーンヲ取テ稀硫酸三滴水ニ瀉ニ溶解シ頓服セシメ，塩酸リモナーデヲ用服剤トナス，腹部ニハ莨菪水銀軟膏ヲ塗擦シ緩和琶布ヲ貼ズ，固形ノ食料ヲ禁ジテ只飲料ノミヲ命ズ，此夜始テ安眠ス

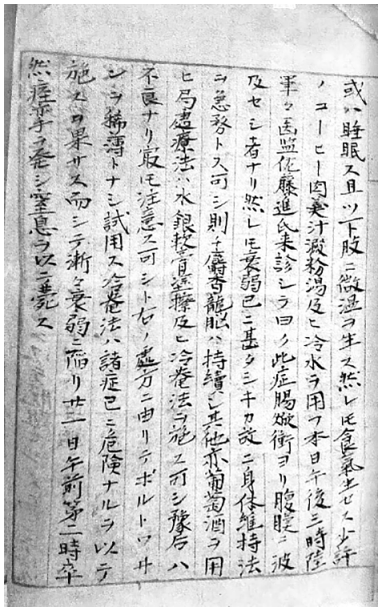
十七日諸症大ニ緩解ス，脈八十搏体温始テ三十七度五分ニ降ル，一昨日以来大便通ゼズ，処方前ニ依ル，大便尚不通ナレバ緩和灌腸ヲ施ス可キヲ議ス，同日午后九時腹満及ビ微痛ヲ発ス平川氏蜂蜜灌腸ヲ施ス，忽チ薬汁ヲ排出ス，続テ下痢七回而して其通ズル所ノ者ハ三四塊ノ硬便ニシテ他ハ只風気ト僅ノ粘液ヲ混ズルノミ，其時々腹痛劇烈冷汗淋漓四肢厥冷脈微細指頭ニ應ゼズ呼吸促迫ス，モルヒネ六分グレーンノ一ヲ投ズルニ次寸功ナキヲ以テコロータイン数滴ヲ用ヒ繆ニ鎮痛ス，然レドモ脈状及ビ厥冷等尚未ダ復セズ，十八日午前三時左側ニ転臥センコトヲ試ミシニ乍チ呼吸促迫顔面及ビ四肢ニシアノーゼズ状ヲ現ジ，眼球上挙シテ将に窒息ニ陥ントス，ニ三十分時間ヲ経テ病症稍々緩解スト云フ

此日早最平川氏ノ急報ヲ得，乃チ往キテ之レヲ診スルニ顔面蒼白四肢厥冷脈沈微ニシテ幾ンド指頭ニ應ゼズ，心跳音モ聴診ニ應ゼズ，腹部膨脹ス，臍下ノ左辺ヲ軽ク按ズルモ痛ヲ起ス，体温三十六度ニ降リ昨日ニ比スレバ衰弱著シク増加ス，食気衰亡只肉羹汁米漿及ビ澱粉湯少許ヲ進ムルノミ，是ノ諸徴候ヲ以テ之レヲ察スルニ下行結腸部ニ炎衝ヲ発セシ者ナルヲ断定ス，然レドモ心悸沈衰将ニ心臓麻痺に陥ラントスル景況アルヲ以テ硇砂加茴香精ヲ内服セシメ，痛処ニ氷罨法ヲ行ヒ午後三時ニ至ル，然レドモ腹痛僅ニ緩解スルノミ，故ニ患部ニ鍼針二十條ヲ放セシニ，其功空シカラズシテ始メテ仰臥或ハ左方ニ轉臥スルヲ得ルニ至ル，然レドモ厥冷及ビ脈状等ハ未ダ全ク復セズ，故ニ芥子浴ヲ以テ下肢ヲ温メ心臓部ニ芥子泥ヲ貼ス，乃チ微温ヲ来タス，同夜安眠セザレドモ頗ル平穏ナリ

十九日病況依然腹部膨脹シテ盲腸部ニ重痛ヲ覚フ，因テ水蛭十五条ヲ放ツ，痛ミ大ニ減ズ，同日午後七時結腸部ニ再ビ炎痛ヲ起ス故ニ，断然又水蛭二十条ヲ放ツ可シト決意ス，然レドモ時間ヲ費スヲ以テ患者ノ苦悩ヲ慮リ一次ニ四十条ヲ放チ吸血ノ央ニシテ食塩ヲ散布シ以テ脱離セシメ，而シテ後水銀軟膏ヲ塗擦ス，此時ニ当リ平川氏ト相議シテ曰ク，縦令炎衝消退セザルモ減殺療法ハ此ニ止マル可シト，内服剤ハ麝香龍脳又ハブランデー葡萄酒等ノ強壮剤ヲ以テ適当ト為スト雖ドモ患者平素一切酒類ヲ嫌悪ス故に只麝香六グレーン龍脳三グレーンヲ水ニ溶シ準備ス，同夜時々眠リニ就ク，二十日午前二時下肢倦怠ヲ訴ヘ脈沈衰呼吸短息シテ四肢厥冷ス，全腹膨脹ス，乃チ是腹膜一般ノ炎衝ヲ来タセシ者トス，又冷汗ヲ発ス，因リテ準備ノ麝香剤ヲ用ヒ下肢ニ芥子泥ヲ貼ズ，四時半頃ニ至リテ諸患徴稍減退シ自ラ軽快ヲ覚フ，或ハ語話シ或ハ



資料4　高松凌雲の記述「従三位有馬頼咸公病状」（久留米市役所文化財保護課所蔵）.



資料5　高松凌雲の記述：三行目に佐藤進氏来診と記述あり（久留米市役所文化財保護課所蔵）.

睡眠ス，且ツ下肢ニ微温生ズ，然レドモ食気生ゼズ，少許ノコーヒー肉羹汁澱粉湯及ビ冷水ヲ用フ，本日午後三時陸軍々医監佐藤進氏来診シテ曰ク，此症腸煞衝ヨリ腹膜ニ波及セシ者ナリ，然レドモ衰弱已ニ甚ダシキガ故ニ身体維持法ヲ急務トス可シ，則チ麝香龍脳ハ持続シ其他亦葡萄酒ヲ用ヒ局所療法ハ水銀軟膏塗擦及ビ冷罨法ヲ施ス可シ，豫后ハ不良ナリ最トモ注意ス可シト，右ノ処方ニ由リテボルトワキンヲ稀薄トナシ試用ス，冷罨法ハ諸症已ニ危険ナルヲ以テ施スヲ果サズ，而シテ漸々衰弱ニ陥リ廿一日午前第二時卒然痙攣ヲ発シ窒息ヲ以テ死ス

明治十四年五月　　高松凌雲謹識』

（資料4）（資料5）

ここに平川良栄と高松凌雲の2種類の御容体書がありますが，その趣は違いがあります．平川良栄の記述は「令扶への差出し分　御容体書」であり，有馬頼咸が死亡に至った経緯を正室に提出した報告書であり，言わば詳細なる死亡診断書と言えるものです．一方高松凌雲の記述は「病状並びに御容体書」であり有馬頼咸の体格，食生活等の記述から始まり診察所見で左下腹部に小塊がある事など病状が詳細に記述されており，言わば診療録（カルテ）そのものです．

この資料の中には，明治14年5月20日午後3時「陸軍軍医監佐藤進氏来診」とあります．佐藤進氏は小生が説明するまでもなく第三代順天堂堂主であり陸軍軍医監（後に陸軍軍医総監）であります．ここに英医ウィリスにイギリス医学を学んだ平川良栄とフランス医学を学んだ高松凌雲とドイツ医学を学んだ佐藤進が集結して有馬頼咸を治療したことを記録した本資料は貴重と思われます．この資料からは有馬頼咸を佐藤進が来診した経緯については不明ですが，興味ある部分であります．小生の推測ですが，有馬頼咸の正室は有栖川宮韶仁親王の王女韶子であり，系図的には有栖川宮熾仁親王（陸軍大将，左大臣）の叔母に当たるので韶子から熾仁親王へ連絡があり熾仁親王から佐藤進へ依頼があったという事が考えられます．

筑後久留米藩医平川良栄については，久留米人物誌[5]や図録日本医事文化史料集成[6]などに「藩命により中山元琳[7]と平川良栄は英医ウィリスが

いる鹿児島医学校に遊学した」とあります．又，私の本にも，このように記載しています．確かに筑後久留米藩医中山元琳と平川良栄の両名が鹿児島医学校の英医ウィリスに英方医学を学ぶ為に明治3年10月から明治4年8月に遊学したのは事実です．しかしながら，郷土史家古賀幸雄氏によれば藩命を受けたのは中山元琳だけで平川良栄は中山元琳に同行の許可を藩に願い出て，許可を得て2人が遊学したのが詳細な事実との事であります．古賀幸雄氏（大正9年～平成18年・享年86歳．京都帝国大学経済学部昭和17年卒）はNHKの「歴史への招待」に出た事がある郷土史家であり，小生の久留米藩史研究の師であります．筑後久留米藩医松下元芳（適塾の塾頭）が福沢諭吉の親友であり，福翁自伝の中に出て来る事や，同藩医中山元琳が松下元芳の従兄弟の当たる事やその他多くの事を御教授頂きました．又，宿題を与えられました．高松凌雲の曽祖母は中山権兵衛（東福童村）の娘とある，凌雲の幼名は権平である．曽祖母の里は久留米藩医中山家の一族に間違いないと考えられるが確証がないので小生に証明するようにとの事でした．小生も，ほぼ間違いないと思うのですが，その理由は高松家が久留米藩内の御原郡古飯村，中山家は藩医に召し抱えられるまでは，御原郡福童村（福童村は東福童村と西福童村が合わさった村）に居住しています．隣村であり，両家は所謂『ご近所さん』である．残念ながらこの投稿時点まで小生はこの宿題ができていません．

最後にご指導いただいた小林晶先生，歴史資料を解読いただいた日本医史学会の斎藤美栄子先生，ご協力いただいた出口洋子様に深く感謝いたします．

付　記

平川良栄の子孫については久留米人物誌によれば，平川良輔は弘化3年（1846）良栄の子として出生．米国留学の拓殖善吾に英語を学び，明治5年，宮本洋学校の助教となる．のち海軍軍医に転じ，少佐で退役後は，東京芝三田台町で開業．大正末期から自適．長男敏行は工学士，次男良三は慈恵医大卒．昭和4年（1929）9月12日没，享年84．女系子孫については小生と親交があり，平川良栄の長女重代，次女巻代は笠原道義に嫁す．笠原道義の長男笠原道雄の子，笠原曄（故人）は日本通運重役．笠原道雄の次男笠原秀雄が平川姓を継いだとの事である（福岡県人医人伝，久留米人物誌・篠原正一著）．

参考図書並びに引用文献等

1）篠原正一．久留米人物誌．久留米人物誌刊行委員会．菊竹金文堂．1981．p.412
2）篠原正一．久留米人物誌．久留米人物誌刊行委員会．菊竹金文堂．1981．p.326
3）小林晶．高松凌雲（1836–1916）とフランス．日仏医学．28；20～30，2004
4）ふみを読む会．高和のゆかり．佐藤進生家の書簡集．佐藤進顕彰会．晃栄社．p.2
5）篠原正一．久留米人物誌．久留米人物誌刊行委員会．菊竹金文堂．1981
6）日本医史学会編．図録日本医事文化史料集成　第5巻．p.283
7）篠原正一．久留米人物誌．菊竹金文堂．1981．p.378